【Meeting Room 3】パネル1

東南アジアのイスラーム書にみる「天国と地獄」
死生観および社会道徳観への影響

代表: 菅原 由美
（大阪大学）

死と終末に関する物語や詩歌は、一般民衆のイスラーム理解に大きな影響を与えてきた。西欧のイスラーム研究者たちは、これまで地獄よりも天国にはるかに多くの注意を払ってきたが、それはイスラームの地獄が、楽園の鏡像として「異様な」醜さを表すにすぎないとされ、キリスト教の場合に比べて、イスラームでは救いが容易に得られ、それゆえに地獄は重要ではないと考えられていたためである。しかし、コーランやハディースには、楽園よりも地獄の記述が多く見られ、ムスリムの誰もが知る『ミーラージュ物語』では、ムハンマドが夜の旅で目撃する地獄の罪人の種類や罰の種類などが詳しく説明されている。同様に、地獄に関する最も有名な物語としては『天国と地獄に関する詳細な知らせ』がある。中世に中東で誕生したこの物語は近代のイスラーム改革運動後も生き残り、イスラーム世界に大きな影響力を及ぼしてきた。東南アジアにおいても、近代以降この物語が最も人気があり、アラビア語からマレー語及び多くの地方語に翻訳される以前から、様々な同テーマのイスラーム諸学書（キターブ）の原典となってきた。例えば、1642 年にアチェでヌルディン・アル＝ラニーリーによって書かれた『来世の知らせ』や 1883 年にザイナル・アビディン・アル＝ファターニーによって書かれた『神秘の顕現』などが有名である。しかし、東南アジアにおける地獄のイメージは必ずしも全て『天国と地獄に関する詳細な知らせ』と同じではなく、時代や地域によって異なっている。本研究は、地獄・天国に関する思想が東南アジア・ムスリム地域で社会に及ぼしてきた影響について明らかにするものである。

久志本は、東南アジアのキターブにおいて、終末と来世の物語の記述にどのようなパターンが見られるのか、またそれがどのように現在に引き継がれ、今日なお人々の関心を集めているのかを説明する。菅原は、19 世紀初頭に宮廷文学として出版されたジャワの『髑髏物語』と、19 世紀後半にキターブとして出版されたマレー語の『天国と地獄に関する詳細な知らせ』を比較し、19 世紀末のオランダ領東インド社会にイスラームの基本原理を強調した地獄や天国のイメージが伝わるようになったことを説明する。川島は、1930 年代にフィリピンのミンダナオで出版されたマラナオの職業歌手が書いた終末論『来世の物語』を分析し、その終末論とマレー語キターブ、及び他のマラナオ語物語との比較を通して、当時のミンダナオで必要とされていた社会的モラルを強調するために、この本の構造と内容が使われていることを検証する。

【Meeting Room 3】パネル1

マレー語キターブにおける終末と来世
人々は何に関心を寄せてきたのか

久志 本裕子
（上智大学）

本報告では、東南アジアのキターブ（イスラーム諸学書）において、終末と来世の物語の記述にどのようなパターンが見られるのか、またそれがどのように現在に引き継がれ、今日なお人々の関心を集めているのかを説明する。イスラームにおける死後の出来事に関する教え、特に終末の日や天国と地獄に関する描写は、東南アジアの一般のムスリムが日常的に関心を持つテーマである。マレーシアやインドネシアの書店に行くと、終末や地獄の様子を表現する天変地異や炎のおどろおどろしい絵が表紙に描かれた本が宗教書のコーナーの大きな部分を占めているのが見られる。テレビやラジオの宗教系番組では、しばしば終末の日に起こるとされる様々な事象や、犯した罪に応じた地獄の責め苦の様子、あるいは地上のかりそめの幸福とは比較にならない天国での享楽の様子などが語られている。本報告では、このような現代の日常においても語られ続ける地獄と天国の描写の原型が、マレー世界のウラマーによって書かれたキターブの中にどのように見出されるのかを論じる。

本報告で主に扱うのは、17 世紀のアチェでヌルディン・アル＝ラニーリーによって書かれた『来世の知らせ』と、19 世紀のパタニでザイナル・アビディン・アル＝ファターニーによって書かれた『神秘の顕現』の 2 点である。この二点は世界の創造と終末、天国と地獄をテーマとしたキターブで、神学の分野に相当するが、神学の学習に用いられるというよりも副読本、あるいは理解を深めるための読み物として伝達されてきた。『神秘の顕現』はジャウィ（アラビア文字マレー語）で書かれたものであるが、近年ローマ字化されたマレー語で出版され、現在までマレー・インドネシア語圏に広く流通している。『来世の知らせ』は出版されていないものの、マレー世界各地に写本が残っていることや、多くのキターブで直接的、間接的に引用されている。これらのキターブは、遅くとも 19 世紀以降の東南アジアにおける天国と地獄の理解のある原型を示していると考えられる。

2 つのキターブはほぼ同じ順番で、世界の創造、人間の死、終末の日の出来事、地獄、天国を描写しており、これらは同じテーマを扱った他の主要なキターブとも共通する。中でも、終末の日に起こる様々な出来事は、非常に詳細であるにもかかわらずほぼ全く同じ順、内容で出来事が論じられている。一方、キターブによっての個性もある。例えば、預言者などが地獄に落ちたものが天国に入れるよう「とりなし」をする場面や、天国での出来事の詳細な描写については、描写の仕方や参照元の扱いに差が見られる。これらの差が見られる部分は議論のある部分だからこそより詳細に記述されているとも読め、現在まで続く人々の関心のありかを示していると考えられる。

【Meeting Room 3】パネル1

19 世紀ジャワにおける地獄物語の変容
『髑髏物語』と『天国と地獄に関する詳細な知らせ』の比較から

菅原 由美
（大阪大学）

天国と地獄に関する最も有名な物語『天国と地獄に関する詳細な知らせ』は 1894 年にマレー語に翻訳され、キターブとして出版され、それ以降、ジャワでも人気を博しているが、地獄に関する情報はイスラーム寄宿学校（プサントレン）世界で学ばれていただけではなく、それ以前からジャワ文学においても取り扱われていたことが、宮廷文学『チェンティニの書』に収録されている別の物語からわかる。スラカルタのパク・ブウォノ 5 世の命で宮廷詩人たちが当時の膨大な数のジャワの物語を収集した文学作品『チェンティニの書』（出版 1814 年）は、その百科事典的性質により、19 世紀初頭のジャワの生活を知る有益な資料とみなされている。この書に収録されている『髑髏物語』はナビ・イサ（イエス）と 1 つの髑髏の出会いの物語で、髑髏の王が、自分がどのように死に地獄に至り、地獄でどれだけの苦しみを体験してきたかを詳細に語る。『髑髏物語』は『チェンティニの書』に収録されているだけでなく、17 世紀にはペルシャ文学世界からマレー世界に伝わったとされ、マレー語やジャワ語の写本が数多く残されている。つまり、遅くとも 17 世紀にはイスラーム的な地獄の表象は東南アジア島嶼部に伝わっているが、この物語の地獄と、19 世紀末に翻訳された『天国と地獄に関する詳細な知らせ』で説明される地獄には違いが見られる。『髑髏物語』には、天使、火、蛇、サソリなどの地獄共通のモチーフは登場するものの、イスラーム終末論が現れない。救済者ムハンマドはまだ存在せず、髑髏王は偶像崇拝の罪により地獄に落とされ苦しむが、ナビ・イサの神への懇願により、生前の貧しい人々に対する奉仕が認められ、髑髏王は天国ではなく、現実の世界に戻ることになる。この物語の教訓は、すべてを司る神の存在を忘れてはならないということである。

一方、『天国と地獄に関する詳細な知らせ』では、終末の日と死に関する説明に多くの章が割かれ、偶像崇拝や多神教は依然として厳しく禁じられているものの、その他のイスラームの価値観は、厳しい終末の日の後に楽園に入るための条件として、より詳しく説明されている。この 2 つの地獄の物語の違いは、19 世紀後半に始まったキターブ出版の増加が、アラビア語文献を通して、ジャワの人々により鮮明で、イスラームの基本原理を強調した地獄や極楽のイメージを与え、イスラームの終末論を伝えるのに役立ったことを推測させる。そして、地獄とそれに続く極楽の物語は、プサントレン世界を超えて、社会に広まっていったと考えられる。

【Meeting Room 3】パネル1

死と終末の語りによる社会道徳の啓蒙
米国統治期ミンダナオの『来世の物語』にみる民謡歌手の意図

川島 緑
（上智大学・名誉教授）

死と終末に関する物語や詩歌は、一般民衆のイスラーム理解に大きな影響を与えてきた。南部フィリピン、ミンダナオ島中部のラナオ地方では、死と終末、来世の様子を描写し、人々にイスラームの教えに従って生きることを説く『来世の物語（カバロル・アキラト）』というマラナオ語の語り物が広く知られている。この物語には様々なヴァージョンがあり、語り手の意図や各時代の社会状況により、扱われるテーマや強調される点が異なる。基本的に語って聞かせることを前提とするため、文字化されたテキストはあまり残っていないが、報告者は 1930 年代から 70 年代にかけてこの地方で印刷された『来世の物語』の数種類のテキストをこれまでに収集することができた。本報告では、これらの中から、1930 年代にマラナオ語民謡・語り物の専門家（オノール：歌手）が執筆し、アメリカ人プロテスタント宣教師の運営する出版社から刊行された『来世の物語』をとりあげ、類似の内容を持つマレー語 3 作品と比較し、このマラナオ語物語の特徴を明らかにする。

これを通じて、マラナオ語『来世の物語』は、17 世紀アチェで活動したイスラーム学者、ヌルディン・アル＝ラニーリー著『来世の知らせ』、同書と共通の内容を持つ『神秘の顕現』（ザイナル・アビディン・アル＝ファターニー著）、『天国と地獄に関する詳細な知らせ』（アル＝カーディー著、リンガ訳）の 3 作品に依拠し、それらの抜粋をマラナオ語に訳し、叙述の順序を入れ替え、さらに、他のエピソードの挿入、言い換え、マラナオ口承文学の作法に則った忠告の追加などのアレンジを加えて編纂したものであることが明らかになった。これらの改変を、米国統治下 1930 年代のミンダナオ島という時代的、地域的文脈の中で解釈することにより、著者の意図や主張を読み取ることが可能となる。『来世の物語』の著者は、天国に迎え入れられた人が享受できる喜びを生き生きと語り、現世において盗みや殺人、詐欺、中傷などの行為を慎み善行に励むよう勧めている。同書を出版した宣教師はアメリカ社会を手本として、ラナオ州のムスリムの間に宗教的規範にもとづく社会道徳を醸成し、彼らを近代的市民に育成することを目指して識字活動や教育活動を行っていた。一方、当時のラナオ地方では、「無法者」による殺人や強盗事件が頻発していた。このような社会状況を考慮すると、『来世の物語』は、この宣教師の思想や活動に賛同する民衆的ムスリム知識人による社会道徳啓蒙の書という面を持っていたとみることができる。